

大勢の人の前で話すことへの意識調査 —大学の新生と上級生の比較を通して—

吉澤英里 (環太平洋大学)

キーワード: スピーチ, 初年次教育

問題と目的

大勢の人前で話すことへの苦手・得意意識に影響を与える要因について調査を行った。また、大学新生と上級生との違いについても検討した。

方 法

調査対象者 環太平洋大学の新生 294 名, 上級生 (2~4 年生) 149 名が調査に協力した。

質問紙 質問項目は吉澤 (2014) を基に, 内容構成能力と他者への意識に関するものを計 11 項目用意した。はじめに「あなたは, 大勢の人の前で話することになりました。その時のあなた自身が一番近いのはどれですか。」と教示した。そして, それぞれの質問項目について, 「0: 全くそう思わない」から「5: 非常にそう思う」の 6 件法で回答を求めた。

さらに, 人前で話すことに対する意識 (苦手・得意意識) を測定した。「あなたは大勢の人の前で話するのがどれくらい得意, あるいは苦手ですか? 他の人と比較をするのではなく, あなた自身の率直な気持ちを答えてください。」と教示し, 「0: とても苦手」から「5: とても得意」の 6 件法で回答を求めた。

手続き 2017 年 4 月上旬に講義の一部で実施した。調査者より調査の趣旨を説明し, 調査協力に承諾する者のみ, 質問紙へ回答するように依頼した。回答時間は約 5 分であった。

結果と考察

信頼性が著しく疑われるものや途中で回答が途切れているデータを分析対象から除外した。分析対象は新生が 287 名 (男性 192 名, 女性 94 名, 無回答 1 名, 平均 18.05 歳, SD 0.28), 上級生が 134 名 (男性 86 名, 女性 46 名, 無回答 2 名, 平均 19.25 歳, SD 0.54) であった。

因子分析 本調査にて作成した尺度の因子構造について調べるため, 最尤法 (プロマックス回転) による探索的因子分析を行った。固有値の推移から 3 因子 (第 1 因子 4.24, 第 2 因子が 1.61, 第 3 因子が 1.34) を採用した。負荷量の高い項目の内容を考慮し, 「因子 1: 内容構成力への自信のなさ ($\alpha = .82$)」, 「因子 2: 行為への嫌悪 (.77)」, 「因子 3: 他者への意識の高さ (.89)」と命名した。

重回帰分析 因子分析によって得られた下位尺度ごとに, 項目の平均値を算出して得点とした。ダミー変数として, 性別 (0: 女性, 1: 男性) と学年 (0: 新生, 1: 上級生) を用いた。Step1 に性別

と学年を説明変数として投入した後, Step2 に各下位尺度を投入した。そして, 苦手・得意意識を目的変数とする階層的重回帰分析を行った。その結果, Step1 から Step2 への変化量が有意であった (Table 1)。性別や学年は苦手・得意意識に影響を与えないことが示唆された。また, 内容構成力への自信のなさや大勢の前で話すことへの嫌悪が強いほど, 人前で話すことを苦手であると感じている一方, 他者への意識が高いほど人前で話すことが得意だと感じていることがわかった。

Table 1 苦手・得意意識への重回帰分析 β 値

	Step 1	Step 2
性別 (0: 女性, 1: 男性)	.004	.016
学年 (0: 新生, 1: 上級生)	-.078	-.030
内容構成力への自信のなさ		-.278***
行為への嫌悪		-.491***
他者への意識の高さ		.325***
R^2	.006	.669***
Adjusted R^2	.001	.665***
ΔR^2		.663

*** $p < .001$

学年による比較 新生と上級生との間で, スピーチへの意識が異なるのかについて検討を行った。この際, 性別が無回答であったデータを分析対象から除外した。因子 1~因子 3 と苦手・得意意識の得点に対して, 学年 (新生, 上級生) と性別 (男性, 女性) の 2 要因分散分析を行った結果, 苦手・得意意識と因子 1 の交互作用が有意であった。他の 2 因子は交互作用, 主効果ともに有意ではなかった。その後の検定の結果, 上級生の女性は新生の女性や上級生の男性よりも, 人前で話すことへの苦手意識が強く, 内容構成力への自信のなさを特に強く感じていることがわかった。

調査対象の大学では, 初年次教育の一環として全 1 年生が参加するスピーチコンテストを年に数回行うなど, 同級生の良い発表を見聞きする機会が多くあった。そのため, 特に女性は自分と優れた同級生とを比較し, かねてネガティブな意識を強めている可能性がある。この点についてはさらに検討が必要であろう。また, 本調査では学年間の比較をおこなったが, 1 年間の取り組みの中で意識の変化についても検討すべきであろう。

文 献

吉澤英里 (2014). 青山学院大学教育人間科学部紀要, 5, 139-147.